

発生の場/Ignition Field レビュー

1月11日(土)から始まった『発生の場/Ignition Field』では、4人のアーティストが展示を行なっている。鈴木淳氏は面白さの中にアイロニカルな意味を含んだ作品が印象的である。今回はゲストキュレーターにセオ・ジュノ氏を迎え、鈴木氏とチェ・ヨンファン氏の日韓合同展も展示内で企画されており、昨今の日韓関係が度々争点になる中で、鑑賞者に一歩引いた視点から問いを投げかける二人の作品は今の私達に何が必要なのか考えさせるものがある。福田篤夫氏は漆を塗った上に銀箔を貼った和紙が壁に並ぶ作品を展示している。塗った回数によって濃さが異なる漆の様子は現代美術でありながら日本美術の繊細さや古くから培われてきた伝統を感じた。上村卓大氏はメインの作品として自身の子供が作ったものを拡大した作品を3つ展示している。個人的には『乾いた石〈日光浴〉』や『2010年のクレートの角』に見られる「時間が経って愛着が湧いた何気ないもの」から制作された作品に温かみを感じた。

また今回会場係として『発生の場/Ignition Field』に関わるにあたり、「アーティストがどれくらい鑑賞者に作品の情報を提示するのか」を自身の疑問・テーマに設定した。このテーマについて展示作業やアーティストトークを振り返ると、アーティストによって大切にしていることは様々だった。今回はハンドアウトなどで作品説明や制作背景について比較的詳細に解説していたアーティストが多かったと思うのだが、その中で「作品解説」に対して懐疑的な意見を示した福田篤夫氏のトークは印象的だった。福田氏はアーティストトークの中で「作品解説」は「手品の種明かし」と同じようなものであると言う考えを述べている。確かに初めから「作品解説」を受け取る鑑賞者は「受け身」になりがちである。「手品」の仕掛けを鑑賞者が自ら考えることで、鑑賞者の「能動性」が促され、作品との対話が成り立ちやすくなるのではないかと感じた。

今回会場スタッフとして展示作業を手伝う中で、アーティストの仕事を間近に見ながら直接話が聞ける貴重な機会を持った一方で、「キュレーション」の役割にも注目した。この学部でマネジメントを学び始めるまでキュレーターの存在について意識したことが無かったのだが、アーティストと鑑賞者の間に立ち展覧会を支えるキュレーターは双方のコミュニケーションを取り持つ橋渡しのような存在であり、他者同士の考えの衝突を防ぐ緩衝材のような役割をも果たしているのではないかと感じた。